

別府大短大 江後迪子

目的 鯛は日本人が好む魚類のひとつで、古くから献上物として知られている。とくに干鯛は吉日における献上品として大名間では広く用いられていた。そこで江戸時代の臼杵藩の御会所日記および祐筆日記を中心に干鯛および鯛について考察を試みた。

方法 臼杵藩御会所日記（1674～1872）は藩の事務所の記録で延べ 171年分、臼杵藩祐筆日記（1801～1870）は江戸および臼杵の各屋敷の奥の生活史で延べ 120年分について、記録に出現する干鯛および鯛を調べ、年代別、地域別、用途別にまとめた。さらに武鑑中にある大名の献上物などとも比較した。

結果および考察 献上物として干鯛を用いる風習は、臼杵藩御会所日記では延宝 8年（1680）三代藩主の初入国に初見され、その後も結婚、元服、髪置、宮参りなどハレの行事に散見されるようになる。しかし、出現回数が増えるのは寛政年間以降で、江戸末期嘉永年間以降は減少傾向が認められる。臼杵藩祐筆日記における屋敷別出現傾向については、資料の年代にずれはあるが、平均年間出現回数は江戸上屋敷Ⅰの71.6回、江戸上屋敷Ⅱの48.7回、江戸下屋敷の42.3回、臼杵城の10.2回であった。干鯛の用途で目立つのは、寛政以降年始に用いる数が増えたため、総数が増加したものと考えられる。また宝暦武鑑から干鯛が見られ、この頃から献上物としての干鯛が定着したのではないかと推察する。